

---

---

# 宝永地震における大坂市中の被害情報について

原 直 史

(新潟大学人文学部)

---

## はじめに

宝永4年10月4日(1707年10月28日)に発生した宝永地震における大坂市中の被害については、各種の史料に記載された実数にばらつきがある。その中にはいくつかのまとまりがあることも知られており、それらをもとに確実と思われる数値から被害の実態を探ろうとする試みも行われている<sup>(1)</sup>。一方で、幕府への報告など確実な史料のみに限定して数値を把握し、それらから実態を復原するべきとの主張もなされている<sup>(2)</sup>。

他方、これらの数値のばらつきがなぜ生じているのか、そのばらつきそのものの意味についての検討は、管見の限りほとんどなされていないように思われる。しかしそのような作業は、個々の数値の性格を理解するうえで必須の基礎となるはずである。さらに災害情報の流通や蓄積のあり方自体を問題とする災害情報論、災害史料論研究に対しても、いくつかの論点を提示しうるであろう。

本稿はこのような問題関心に基づいて、現在知られている被害数に関する史料を再検討し、その情報の流れを考察する試みである。

## 1 史料の成立年代と被害数のパターン

### (1) 史料の成立年代

末尾の付表は、これまでに確認できた30種の史料について、被害の実数を中心としたそれぞれの記載内容に加え、判明する限りのそれぞれの史料の成立事情を付してまとめたものである。ここからまずそれぞれの成立年代について検討すると、およそ以下のように分類できる。

- a. ほぼ同時代 (10?)・15・(16?)・17・18・19・20・23・24・26・27・28・(30)
- b. 19世紀半ばまで 4・6・7
- c. 安政地震時 1・2・3・9・10・22・25・29
- d. 不詳 5・8・11・12・13・14・21

aには、各種日記類に記されていることから判断して、地震後に得た情報をリアルタイムに筆録したことがほぼ確実であるものを多く含んでいる。ただし公的ルートで幕府等に報告された数値が写されたものから、伝聞を筆録したものまでその性格は多様である。また、30の「大地震記」は随筆調の見聞記で、作品としての完成までには一定の時間を経ていることが想定されるものの、「今日未申ノ中間水陸ニテ町々ヨリ其数ヲ録シテ指出サセ集メケルニ、地震ノ難ニ罹テ陸ニ死スル者其数上巻ニ載ルカ如シ、此ノ大波ノ災ニ過(遇誤写か)テ水ニ死スル人其数一萬貳千六十三人ト算タリ」<sup>(3)</sup>などの記述から判断して、伝聞ではあるものの、町政機構を通じて集計された数値に関するリアルタイムな情報に基づいて記録していることが伺える。

bはその後19世紀半ばまでの間に成立した史書や随筆であり、作成時に参照利用された情報が確実なものであるかの判断が必要となる。これら後年に成立した史料の中でとりわけ注目されるのは、cとしてまとめた一群の史料である。これは嘉永7年（1854年、後に安政と改元）の安政南海地震に際して作成された諸史料の中に、想起されるべき過去の災害として宝永地震の被害情報が付随的に記されたもので、これが相当数存在する点にまず注目しておきたい。これも当然ながら、どのような者がどのような情報を参照して作成したのかが問題となってくるであろう。

## （2）被害数のパターン

続いて被害数について、ここでは倒壊家屋軒数に着目して整理すると、以下のようになる。

a. 603軒 1下・5・10・12・14下・20・27

b. 620軒 11・25

c. 630軒 13

d. 900軒程 15・23上

e. 940軒余 26上

f. 980軒 16

g. 993軒 7・9下

h. 1061軒 1上・2・3上・14上・22・29

i. その他 513軒（9上）1060軒（21）数万軒（24）17004軒（17）15000余宇（30）10630軒余（19）

このうち極端にかけ離れている1万以上の数値は、棟数ではなく竈数（借家・借地人も含む世帯数）で把握された数値を混同しているものであろう。これを除くと、数値は600軒台のもの、900軒台のもの、そして1061軒とするものに大きく括ることができる。

これらを前項の成立年代とあわせて検討すると、以下のような興味深い事実が判明する。まず地震直後に記録されたことが確実で、その筆録事情も明確に判明する史料にみられる数値は、603軒と900軒程および940軒余とする数値である。これらの数値は確かな根拠があるものとして扱って良いであろう。

一方で1061軒とする史料は多いが、成立年代不明の1点を除くと、他はすべてが安政地震時に作成された史料であることが特徴的である。このような明瞭な傾向が認められる以上、この数値は利用に際して細心の注意が必要となるであろう。

このうち3の「浪速之震変」は、前文に「御公儀様江書上之写」という記載があるものの、付表に示した書誌情報等から、安政地震に際して発行された読売類を集めた史料と判断でき、被害数を列挙した部分の冒頭には「嘉永七甲寅年迄百四十八年二成」という記述もみられる<sup>(4)</sup>。被害数は異なるものの、現物写真から読売の刷り物であることが確実な25の「大昔宝永四年地震津浪聞書」<sup>(5)</sup>に同様の記載がみられることも、3の「浪速之震変」が読売に基づくものであることの傍証となるだろう。また原史料を未確認のため現時点では推測に過ぎないが、14の「大阪諸国大地震大津浪並出火」や22の「大地震大津浪末代噺」も、表題その他からみて、安政地震時に発行された読売、あるいはそうした読売をもとにして筆録したものである可能性が高いと考える。

なおこの系統の史料では、例えば3のように崩家を1061軒と集計した後に、「浜々大船ニて押崩され潰家」としてさらに603軒を挙げるものがある。大船の遡上による被害があったこと自体はよく知られており事実といえるが、603軒という数そのものは、上述した別系統の数値に基づくものと考えられる。これはすなわち別種の数字を積み増して、被害を過大に見せるための作為を行っているのではないかということであり、注意を払う必要があるだろう。

この他 620 軒とする史料のうち、前述したように 25「大昔宝永四年地震津浪聞書」については、現物写真から安政地震時に発行された読売の刷り物であることが確実である。おそらく 11「諸国地震年代記・地震津浪聞書」も、同様の刷り物に基づく写本ではないかと推測される。

以上、宝永地震に際しての大坂の被害実数を伝える史料については、リアルタイムに集計された数値であることが確実なものがある一方で、安政地震時に作成された一群の史料が存在すること、そして後者は、単に時代を隔てているというだけではなく、史料の性格についても慎重な扱いを要する側面があること、などが判明した。

## 2 被害情報の 5 つの流れ

本節では、前節での分析・分類を踏まえ、被害情報の作成・筆録の流れという観点から、これをいくつかの系統にまとめて考察することとしたい。

### (1) 「900 軒程」「940 軒余」の系統

確実な同時代の史料である「楽只堂年録」に、潰家 900 軒程、死人 260 人程等の数値が記載されている。これは「大坂町中崩家死人等覚」という表題と 10 月 5 日の日付が付された報告書の写しである<sup>(6)</sup>。一方同様に確実な同時代の史料である「鸚鵡籠中記」には、「今月（10 月）六日迄大坂町奉行衆へ書上御座候」として、近似した数値が記載されている<sup>(7)</sup>ことから、上述の報告書の作成主体は大坂町奉行所であったと推測することが可能である。一方で、「楽只堂年録」と全く同じ数値が、以下に引用するように秋田藩家老岡本元朝の日記にみられる。

#### 【史料 1】<sup>(8)</sup>

一 十三日薄曇ル（中略）○去四日之地震大坂 御城ハ無別条、但瓦落壁割まで之由、京橋筋銅御門倒候由、尤御曲輪之外也、高汐ニて廻船川中へ流込候由、町屋土蔵共ニ九百軒程潰候よし、橋三十五六落候所、損候所共ニ有之、男女死人式百六十人余有之由廻状ニ申来候也

岡本元朝はこの年 4 月に出府し、地震当時は秋田藩江戸屋敷に滞在していた。ここから注目されるのは、下線を付したように、この被害実数を含む大坂の被害情報が、廻状によってもたらされていることである。これは諸藩江戸屋敷の留守居に宛てて廻達された大目付廻状であると考えられ、幕府が主体的にこうした情報の共有を図っていたことが知れるのである。

以上から、この倒壊 900 軒程（または 940 軒余）、死者 260 人程（または 264 人）、落橋 35、6ヶ所という被害の数値は、地震直後の 10 月 5 日ないし 6 日までに大坂町奉行所の手で把握され、江戸にもたらされた後、10 月 13 日までに幕府の廻状を介して各藩江戸屋敷でも共有された情報である、とその流れをまとめることができる。

### (2) 「603 軒」の系統

確実な同時代人の記録とみてよい「塩尻」に、棟数 603 軒、竈数 10100 軒、圧死 3620 人、溺死 12000 人余等の数字が挙げられている。一方 603 という棟数はないものの、他はほぼ同様の竈数 16000 余、圧死 3630 人、溺死 12100 人余という数値が、「鸚鵡籠中記」に載せられており、これには「今月十日迄之書上也」と附記されている。矢田俊文氏は、これとは異なる系統の数値を載せる「朝林」にも「十月十日迄公儀御帳面写のよし」と記されていることとの対比などから、上記「塩尻」「鸚鵡籠中記」の数値は 10 月 10 日より少し早く把握されたものであろうと推測している<sup>(9)</sup>。

このことに関連して、18の「江府京駿雑志」が、やはり603軒という数値はないものの、他は崩家10630軒余、圧死3620人、溺死12000人という類似の数値を載せていることが注目される。先述したように10630なる数値は竈数と混同したものと考えられるので、これも含めて同系統の情報と判断して良いだろう。そしてこの史料には「右ハ同月七日迄相知タル分也」という記述があるのである。なお「江府京駿雑志」の筆者今枝直方は後に加賀藩家老となる上級家臣であり、当史料は随筆調の記録ではあるが、前述したような幕府と諸藩が共有した情報に接することができる地位にあった同時代人の記録と位置づけることができる。

もっともこの系統の情報が(1)のように諸藩江戸藩邸で共有されたことを示す直接の史料的根拠は、現在のところ見いだすことができない。前出「岡本元朝日記」でも、廻状でもたらされた情報の記載は、10月13日条の次には10月20日条に登場するが、これは死者16000人余、潰家は町積りにして560町余というものであり、明らかに本項の系統の情報ではない。

その一方で、以下に示すような興味深い史料も存在する。

#### 【史料2】<sup>(10)</sup>

- 一 十月四日昼九時大坂地震、潰家死人大分之由御蔵元言上、夜二入四時二至鎮侯由、同日高潮所々橋落、家流夥敷、潰家軒数六百三軒、内竈数壱万六、陸死人三千六百廿人、溺死人壱万貳千人、落橋廿五、折橋四、船大小百廿七艘、同時京都・郡山・江戸表共ニ地震之由

これは福岡藩士長野常言による「長野日記」の一節であり、前後の記載から判断して、当時長野は右筆として福岡で勤務していた。ここにも潰家603軒、竈数10006、圧死3620人、溺死12000人という、本項の系統の情報が記されているが、これは下線部からわかるように、大坂蔵屋敷から報知されたものであった<sup>(11)</sup>。

これに関連して、付表の10「諸国大地震大津浪一代記」および1「名なし草」の上段の記載にも注目したい。いずれにもこの603軒系統の数値が記載されるが、前者は「天王寺屋五兵衛」の日記帳からの写し、後者は「大眉氏の所蔵せる」ものの写しであるという。諸藩蔵屋敷の名代や蔵元などを勤めた大坂の有力両替商である天王寺屋五兵衛は、その苗字が大眉であることから、この両者は同じ原典に基づく記録である可能性が高い。こうした町人の情報入手ルートとしては、一方で奉行所から直接のルートもあり得たであろうが、他方蔵屋敷経由のルートも想定できるだろう<sup>(12)</sup>。

この系統の数値がどこでとりまとめられたかを直接示す史料は現在のところ得られていないが、内容からみて(1)と同様大坂町奉行所の周辺とみて大きな誤りはないであろう。10月7日から10日頃までにまとめられたこの情報は、やはり(1)と同様江戸に送られ藩邸ルートで共有された可能性があるが、それとは別に大坂において蔵屋敷が結節点となって、諸藩の国元に伝えられるというルートが、一方で機能したのであった。

こうして広く流布したこの系統の数値は、様々な形で筆録され伝えられた。幕府の正史といえる「徳川実紀」が採用したのもこの系統の数値である。筆録の過程で誤写等により、様々なバリエーションが生じた。例えば竈数の10100、10600、10006、16000などがそれである。相互の比較により、崩家603、竈数10600、圧死3620、溺死12000がオリジナルの数字ではないかと推測できるが、なお検討が必要であろう。

また(1)より後に集計された数値であるにも関わらず、崩家数が減少している点が問題となるが、この点に関しては、(1)の系統に属する「楽只堂年録」の数値に「納屋・土蔵共」と記されていること、同じく「岡本元朝日記」の数値に「土蔵共」と記されていることとの対比で考えると、納屋・土蔵を含むか含まないかの違いに基づく可能性がある。これもなお検討すべき課題である。

### (3) 「993 軒」の系統

これは付表の7「摂陽奇観」および9「地震海溢記」の下段の記載にみられる数値である。詳細な内訳に相違はあるものの、潰家（倒家）の993という数値以外にも、死者541人、潰船707艘といった基本的な数値が共通しており、両者は同系統の情報であると判断される。前者では船の内訳が詳細であったり、後者では摂河在方の寺院など大阪市中以外の被害状況もあわせて記されるなど、他にない特徴がみられる数値でもある。

このうち「地震海溢記」における被害数記載部分の直前には、次に引用するような史料があわせて筆録されている。

#### 【史料3】<sup>(13)</sup>

大坂御城内日記書抜

(中略、10月5日付城番・町奉行より老中宛報告、10月29日付城代より老中宛報告)

先頃爰許地震ニ付死人大分ニ有之由風説被聞召候、最前有増申上候得共、相分候分可申上与奉得貴意候、追々委細遂吟味可申上と延引仕候、此段早紙差上申候、以上

十一月十三日

土岐伊予守

御老中

この記述の後に「十月四日午下刻地震高汐ニ付大坂町中并摂河在々潰家死人落橋潰船等之覚」との表題のもと、付表にあげた被害数の一覧が示され、末尾に再度11月13日の日付が記されているのである。

ここで差出者となっている土岐伊予守は当時の大坂城代土岐頼殷であり、中略部の城番・町奉行も含めこの「御城内日記」に記された人名に矛盾はない<sup>(14)</sup>。そして11月13日という日付の一致に着目するならば、史料3で城代土岐頼殷が、江戸から求められながら延引したままになっていたという詳細な被害数を、ここであらためてとりまとめて提出したものがこの一覧である、という解釈もできるであろう。

大坂城中で作成された、このような江戸とのやりとりの控えを、誰がどのような経緯で入手し筆写し得たのか、そしてそれは確かなものなのか、という考察がなされるべきだが、ここでは論点を提起するにとどめ、今後の検討課題としたい。

### (4) 「1061 軒」の系統

この系統の数値は、前述したように安政期の記録に限って特徴的に表れるものである。史料には詳細な内訳が付されるが、被害を過大に見せる意図的な数値の操作とみられる事例も確認でき、また多くが読売とみられる史料に記されていることも、前述した通りである。

この数値は『大阪編年史』に「御触及口達」の記載として採録されていることから、奉行所が関与した情報として信を置く研究もみられる<sup>(15)</sup>。しかしこの『大阪編年史』の記載は、以下に示すように問題のあるものである。

まず『大阪編年史 第7巻』におけるこの部分の出典表記は、「御触及口達 安政元年」というものであり、前述したようにまず安政地震時の記録であることが確認できる。次にこの「御触及口達」とは、周知のように、明治34(1901)年に開始された『大阪市史』編纂事業に際して、幸田成友以下の編纂係員が各種の触書・口達類を収集し、編年・編集したものであって、後に大阪市史の第三・第四巻として印刷刊行された<sup>(16)</sup>。しかしながらこの刊行された『大阪市史』には、該当する記載が安政元年および宝永4年のいずれの年次においても確認できないのである。

一方『大阪編年史』自体もまた、幸田らにより編纂された稿本の『大阪編年史料』に基づき、昭和42(1967)年以降順次印刷刊行したものである<sup>(17)</sup>。そこで今回この稿本の該当箇所を確認したところ、以下のように刊本にはない記述を見いだすことができた。

【史料4】<sup>(18)</sup>

御触及口達 安政元年 十一月十七日御触

「是ハ官府ノ調査力御触原本可見」(付箋)

宝永四亥年十月四日午下刻大坂大地震ニ付(中略)

...

船数 三百艘斗

○本被害調査ハ安政元年十一月四日ノ条所収同月十七日附報告書ノ前ニ附載シアリ

下線を付した部分が刊本にない記述である。安政元年(嘉永7年)11月4日はまさに安政南海地震の当日であるが、現行刊本の「御触及口達」において、この日付前後にこのような宝永地震時の被害一覧が見いだせないことは前述したとおりである。さらにこの記事にはおそらく明治期の編纂関係者の手で、疑義を示す付箋が付けられていた。確かにこの記事は御触や口達の体裁をなしておらずそもそも不自然である。原本を確認すべしとしたのは当然であろう。

以上のことから、おそらく次のような流れが推測できるであろう。明治期の大阪市史編纂に伴う「御触及口達」編纂の過程で、典拠とした触留類のいずれかにおいて、安政地震時の記録の中にこの宝永地震の被害情報があわせて筆録されていた。これがまず稿本の「御触及口達」に収録され、さらに稿本の『大阪編年史料』にも収載された。しかし前述したような不自然さから、疑義を示す付箋も立てられた。一方昭和の『大阪編年史』印刷刊行に際しては、こうした疑義は見落とされ、他の史料と同列に収載されることになってしまったのである。

以上のように、この1061軒系統の情報は様々な問題をはらんでいることが明らかである。安政地震時に読売などで広く流布したことが判明する一方で、確実に成立が宝永期に遡る史料は確認できない。数値の具体性から、何らかの根拠がある可能性はあるが、確実な史料でその根拠が確認できない以上、扱いには慎重であるべきである<sup>(19)</sup>。

#### (5)「620軒」の系統

前述したように安政地震時に刊行された読売であることが明らかであり、そうした点では(4)の系統と共通の性格を持つが、数値は全く異なっている。

このうち南組の圧死3620人、溺死12000人という数値は、前述した(2)系統の情報に基づいて見られる。しかしながら(2)におけるこの数値は、大坂三郷全体の合計数として示されていたはずである。一方これに対して北組では圧死2321人、溺死12030人とあるが、まずこの溺死12030人という数値は、(3)の系統に属す9「地震海溢記」の下段に、「外ノ書物ニ水死壱万式千三十人と有之」とあるものと一致する。また圧死2321人は、本節の5つの系統のいずれにも属さないが、史料の性格から確実な同時代の情報とみなせる28「朝林」の5351人と対応していることができる(五と式は文字の崩し方によって混同しやすい場合がある)。しかしながらこのいずれも、大坂三郷全体の数値として記載されていたものである。

以上から判明するようにこの「620軒」系統の史料は、それまでに伝来した各種の数値を北組・南組に別個に割り振ることで、ことさらに死者数を多く見せるという、明らかな作為の跡が見られるのである。読売として扇情的であることを狙ったかかる作為が明瞭な本系統の情報は、事実から

はもっとも遠いところにあると評価することができるであろう。

## おわりに

本稿では、これまでに知られている宝永地震における大坂市中の被害情報が、史料の成立年代・成立経緯と倒壊家屋数など数値自体とに注目して分析することによって、主に5つの系統に整理できることを示した。このうち900軒程・940軒程の系統と603軒の系統は、地震直後およびそのまた数日後に大坂町奉行所などが把握した確実な数値であり、諸藩江戸藩邸に宛てた幕府の廻状や、大坂蔵屋敷から国元への報知などにより、各地に流布していった様子も確認することができた。

一方で、安政地震時に過去の被害の参照記録として筆録された情報が一定数存在することも、明らかになった。1061軒の系統と620軒の系統の情報は、主にこの時期に筆録されたものであった。そしてこの系統の情報が多く読売などで流布したこと、さらにその中には被害を過大に見せる作為の跡が見受けられること、も明らかになった。このことは、これらの情報を事実として扱うには慎重であるべきことを示しているが、一方でこのように情報が蓄積され加工・変形されて、はるか後年に流布していく過程そのものも興味深い論点である。

本稿の分析によって、宝永地震の大坂の被害をめぐる各種数値を扱う際の、基本的な出発点は確立できたと考える。今後さらに史料発掘を含め考察をすすめていくことで、災害情報の流れ自体についての認識を深めていくことが、今後の課題であるといえる。

## 註

- (1) 西山昭仁・小松原琢「宝永地震（1707）における大坂での地震被害とその地理的要因」（『京都歴史災害研究』10、2009）、長尾武「宝永地震（1707）による大坂三郷（北組・南組・天満組）での崩家率」（『歴史地震』27、2012）等。なお西山・小松原2009で『摂陽奇観』の数値を天満組だけのものとして扱っているのは、大坂三郷全体を示す「大坂・天満」（大坂＝南組・北組と天満組）という表記を、「大坂の天満組」と解釈したことに基づくものであり、再検討を要すると考える。
- (2) 矢田俊文「1707年宝永地震と大坂の被害数」（『災害・復興と資料』2、2013）
- (3) 「大地震記」。『新収日本地震史料第三巻別巻』（東京大学地震研究所、1983）に翻刻が収載されているが、大阪府立中之島図書館所蔵の原本により校合をおこなった。
- (4) 「浪速之震哀」『大阪編年史 第7巻』（大阪市立中央図書館、1969）所収。なお大阪市史編纂所において原典の調査を行ったが、確認できなかった。
- (5) 東京大学大学院情報学環・学際情報学府図書館所蔵小野秀雄コレクション。以下のURLで現物の写真が確認できる。[http://www.lib.iii.u-tokyo.ac.jp/ono\\_collection/contents/item.37.N001.html](http://www.lib.iii.u-tokyo.ac.jp/ono_collection/contents/item.37.N001.html)
- (6) 前掲矢田2013。
- (7) 同前
- (8) 「岡本元朝日記」宝永4年10月13日条。宇佐見龍夫編『日本の歴史地震史料 拾遺4ノ上』（東京大学地震研究所、2008）に翻刻が収載されているが、秋田県公文書館所蔵の原本により校合をおこなった。
- (9) 前掲矢田2013。
- (10) 「長野日記」。秀村選三編『近世福岡博多史料 第一集』（西日本文化協会、1981）および『新収日本地震史料 補遺別巻』（東京大学地震研究所、1989）に翻刻が収載されているが、福岡県立図書館所蔵原本のマイクロフィルムにより校合をおこなった。
- (11) 塚田孝氏は、福岡藩の事例等を用いて、諸藩大坂蔵屋敷が、大坂町奉行所の広域行政に関わる機能をはじめと

して、単に蔵物販売に限らない多様な機能を担っていたこと、また「蔵元」は、少なくとも17世紀段階では、蔵米販売を担う者の肩書ではなく、蔵屋敷そのものを指す語として使用されていたこと、等を明らかにしている(塚田孝「巨大都市大坂と蔵屋敷—福岡藩蔵屋敷を中心に」脇田晴子他編『周縁文化と身分制』思文閣出版2005、のち塚田『近世大坂の都市社会』吉川弘文館、2006に収載、など)。また主張の力点は異なるが、福岡藩の蔵屋敷を素材として森泰博氏も同様の指摘を行っている(『福岡県史 通史編3 福岡藩上』第二編第四章第二節「大坂蔵屋敷」、森泰博氏執筆部分、1998)。この史料はそうした蔵屋敷の多様な機能を示す事例の一つであるが、同時にこの史料の「蔵元」がいわゆる町人蔵元であるのか、蔵屋敷そのものを指しているのかについては、この史料からだけでは判断が困難である。

- (12) これと関連して、三井家大坂店よりの報知にもとづくと思われる16「宝永四年丁亥十月四日大地震之由来」の記述に、「十月十八日此書附大坂与力参り候」とあることなども、注目されるであろう。
- (13) 「地震海溢記」。『新収日本地震史料第三巻別巻』(東京大学地震研究所、1983)に翻刻が収載されているが、慶應義塾図書館所蔵の原本により校合をおこなった。なお『新収日本地震史料』における書名「地震海溢考」は誤記である。
- (14) 大阪府立中之島図書館編「大坂城代・定番・町奉行・加番一覧」。  
[http://www.library.pref.osaka.jp/nakato/event/bushi\\_p3.pdf](http://www.library.pref.osaka.jp/nakato/event/bushi_p3.pdf)
- (15) 前掲長尾2012など。
- (16) 「編纂の顛末」(『大阪市史 第一』大阪市参事会、1913)、「凡例」(『大阪市史 第三』大阪市参事会、1911)など。
- (17) 「編集事歴」『大阪編年史 27巻』(大阪市立中央図書館、1979)など。
- (18) 大阪市史編纂所所蔵。題箋には「大阪編年史」とあるが、「大阪編年史料」と柱に印刷された原稿用紙に清書されている。
- (19) 付表の30「大地震洪浪見聞筆記」や3「浪速之震変」前半のように、この1061軒系統の史料には、宝暦6(1756)年の50回忌にあたって梅田で行われた法要の記述を含むものがあり、この系統の情報の伝来を推測する手がかりとなる可能性もあるが、なお検討課題であろう。

#### 付記

本稿は2012～2015年度科学研究費補助金基盤研究(B)「前近代の地震による家屋倒壊率と津波到達点の研究—1707年宝永地震を中心に—」(研究代表者：矢田俊文)による研究成果の一部である。

史料調査に際しては、大阪府立中之島図書館、大阪市史編纂所、大阪市立中央図書館、秋田県公文書館、東京大学地震研究所、財団法人三井文庫、福岡県立図書館、慶應義塾図書館のスタッフの方々にお世話になりました。記して謝意を表します。



付表 宝永地震における大坂市中の被害数を伝える史料一覧

原典	収載書	被害状況	筆録事情等	書誌情報等	地震史料等への収載状況他	
1	名なし草	大阪編年史	北組 崩家579軒 死人278人 内男114人女164人 南組 崩家314軒 死人145人 内男64人女81人 天満組 崩家168軒 死人111人 内男31人女80人 三口崩家合 1061軒 死人惣高534人 内男209人女325人 死亡人7000人余 家数603軒 洪水にて死亡人10000人 舟数300艘 橋数50余	「予か祖父書おけるを記す」 「大眉氏の所蔵せるを借りここに写す」「大坂地震の控」	東岡と号する人の隨筆にして嘉永二年の著。同年の序及嘉永七年の跋文あり。上巻には大坂御城代之事、大坂御城御多門消失之事等三十項に別ち、下巻は大坂大地震之事、四天王寺炎上之事等、十八項に別ちて記述せり(『大阪市史引用書解題未定稿(上)』) 大坂市立中央図書館蔵、他に加藤以修著手稿本二冊大阪府立中之島図書館にあり (国文学研究資料館「日本古典籍総合目録データベース」より)	『新収日本地震史料第三巻別巻』
2	御触及口違	大阪編年史	三郷崩家合1061軒 同死人合534人 内男209人女325人 高汐ニ而溺死人凡10000余 橋数50橋 船数300艘計	「安政元年」とあり	『御触及口違』は幸田成友らが諸書より編纂集成して明治44～大正2年に刊行したものだが、現行刊本に当該記載は見られない	『新収日本地震史料第三巻別巻』
3	浪速之震夏	大阪編年史	北組 崩家大破損579軒 死人男144人女164人 〆308人 南組 崩家大破損314軒 死人男64人女81人 〆145人 天満組 崩家大破損168軒 死人男31人女80人 〆111人 崩家大破損〆1061軒 他に崩納屋33ヶ所 死人男女〆564人 町数〆146町 竈数〆3216竈 町々崩門〆99ヶ所 浜々大船にて押崩され潰家 凡603軒 落橋 北組2所 南組17所 天満組7所 〆26橋 外二大損4橋 廻船大小破損〆320余艘 溺死人凡7000余	「御公儀様江書上之写」「嘉永七甲寅年迄百四十八年二成」 「北辺去旧家ニ所持被致宝永四年之比の日記書之写」	安政元年の大地震・大海嘯の大坂に於ける景況、死人其他の被害を録し、大地震未代断種・大津浪未代断種といへる断片、約四十葉綴ちたり(『大阪市史引用書解題未定稿(下)』)	『新収日本地震史料第三巻別巻』
4	徳川実紀	大阪編年史	民屋10600転覆 生口3020人ほど死失	常憲院殿御実紀卷五十六 国史大系本によれば引書は「日記」と「文露叢」	文化6年編纂開始、天保13年完成献上。常憲院殿御実紀の林述斎による校閲は文政2～4年(藤實久美子「徳川実紀の編纂について」『史料館研究紀要』32号、2001)	『新収日本地震史料第三巻別巻』
5	宝永度大坂大地震之記	大阪編年史	合潰家603軒 竈数10600余 死人12000人 廻船320艘 落橋26壱	『大阪編年史料』稿本に「生田氏蔵」とあり		『新収日本地震史料第三巻別巻』
6	年代著聞集	大阪編年史	七郎右衛門町二丁目年寄より北組惣会所宛届 角屋敷1ヶ所 表屋敷13ヶ所 〆16(ママ)ヶ所 死人4人 外二借家崩家竈数31軒		樹林亭李杏著 雑史 写本所在国立国会図書館(元和元・正徳六・元文元・寛延四、一〇巻目録一巻一三冊)、大阪府立中之島図書館(元和元・文化一五、目録共一五冊)、東京都立中央図書館加賀文庫(元和元・正徳六・元文元・寛延四、一〇巻目録一巻一三冊) (国文学研究資料館「日本古典籍総合目録データベース」より)	『新収日本地震史料第三巻別巻』
7	摂陽奇観	西区史	潰家993軒 曲家781軒但住居ならざる分 潰蔵29ヶ所 破損蔵38ヶ所 潰納屋69ヶ所 破損納屋33軒 潰小屋 14軒 但し町人屋敷之内ニ有之分 落橋31ヶ所 破損橋14ヶ所 内1ヶ所公儀はし 潰門 180ヶ所 但町境之門也 破損潰船 707艘 但大坂諸川船之分 行衛不知船 156艘 合863艘 破損潰船 9艘過書船 7艘伏見船 廻船破損 93艘 内8艘地廻船 60艘田舎廻船 25艘船主不知 痛船 336艘 内47艘地廻船 289艘田舎廻船 死人541人 内9人溺死 内男212人内88人男子 女329人内95人女子	「大阪天満惣町中崩レ家并死人同日高汐ニ付破損潰船溺死之覚」	浜松歌国著 隨筆 写本所在天理大学附属天理図書館高木文庫・翻刻『浪速叢書』一～六(国文学研究資料館「日本古典籍総合目録データベース」より) 浜松歌国は大坂の歌舞伎狂言作者・読本作者・考証家 安永5～文政10 なお巻五十一以後は歌国没後天保4まで書き継ぎ有、筆者不詳	『新収日本地震史料第三巻別巻』
8	宝永四年亥十月四日大坂大地震之事	西区史	打れ死人3620人 津浪死人12000人		12と同史料か	『新収日本地震史料第三巻別巻』

9	地震海溢記		倒家数 513軒 内南組236軒 北組115軒 天満組162軒 死人 128人 内南組15人 北組60人 天満組53人 水死人414人 内153人 226人 58人 〆542人 橋落22ヶ所 北組14橋 天満組8橋 外本ニハ高汐之節水死人12000余人とあり 潰家993軒 但土蔵納家とも 大坂之分潰寺7ヶ寺 摂州在々潰寺21ヶ寺 河州同23ヶ寺 落橋 31ヶ所 潰船大小707艘 但大坂諸川船 破船93艘 死人 541人 男212人 女329人 流家 穢多村186軒 道場潰家 同1軒 溺死人13人 地震ニ付死人之事歟 外ノ書物ニ水死12030人と有之	「大坂大地震津浪之事」  「十月四日午下刻地震高汐ニ付大坂町中并摂河在々潰家死人落橋潰船等之覚」 「十一月十三日」	慶應義塾図書館所蔵。『新収日本地震史料』の「地震海溢考」は誤記。筆者不詳の雑録。安政地震時の幕府内文書、宝永～文政期の大阪を中心とした年代記、安政地震時の読売類等の筆写。宝永地震の記事は上述年代記に含まれる。	『新収日本地震史料第三巻別巻』
10	諸国大地震大津浪一代記		潰家603軒 竈数10600竈 打れ死人3620人 津浪ニ而死人12000人 廻船320艘 落橋46橋	「宝永四年亥十月四日大坂大地震之日記帳ら抜書之写 但天王寺屋五兵衛殿」	東京大学地震研究所石本文庫。全体は安政2年10月「禾村氏店茂七郎写之」。安政地震時までの諸記録の筆写	『新収日本地震史料第三巻別巻』
11	諸国地震年代記・地震津浪聞書	南北堀江誌	南組北組地震にて潰家 620軒 南組押打死人 3620余人 北組同 2321人 南組津浪にて水死 12000人 北組同 12030人 落橋 22 折橋4 死人惣合29981人			『新収日本地震史料第三巻別巻』
12	宝永四年亥十月四日大阪大地震之事	南北堀江誌	潰家 603軒 竈数10600竈 打れ死人3620人 津浪死人 12000人 廻船 320艘 落橋 46橋	「拾月四日より今(拾月)拾一日迄地震に而潰家死人崩船橋之數」	「三宅氏所蔵留書」とあり	『新収日本地震史料第三巻別巻』
13	今昔地震津浪説	南北堀江誌	棟数 630軒 竈数 16000 死人 6000人 水死人 12000人 落橋 36橋			『新収日本地震史料第三巻別巻』
14	大阪諸国大地震大津浪並出火	南北堀江誌	北組 崩家 579軒 死人 278人 男114人 女164人 南組 崩家 314軒 死人 345人 男148人 女287人 天満組 崩家 168軒 死人 111人 男31人 女80人 三郷崩家 〆 1061軒 死人 〆 734人 家数603軒 橋数 50 船数大小1300余艘 水亡人 7000人余 洪水にて死人 10000人	「大地震大津浪にて破潰家死人舟橋左の通」		『新収日本地震史料第三巻別巻』
15	楽只堂年録		潰家・納屋・土蔵共凡900軒程 死人男女凡260人程 橋破潰又ハ葺申候分凡35.6ヶ所	「大坂町中崩家死人等覚」10/5付報告(町奉行か)	柳沢吉保の公用日記 大和郡山市柳沢文庫所蔵	『新収日本地震史料第三巻別巻』
16	宝永四年丁亥十月四日大地震之由来		崩家数 980軒 外ニ大破損多有之 竈数 20000軒余 落橋 36 外に破損有之 上荷茶船鋸先石艘(ママ)伝馬は只今相改候得共不相知。凡800艘知れ申候 死人 10061人 町方ニ而家崩れ打れ候分 橋ノ上水ニ而死人20600人余	「右之通先改申候而江戸表へ申遣ス分」 「十月十八日此書附大坂与力る参り候」	財団法人三井文庫所蔵	『新収日本地震史料第三巻別巻』
17	居家日記		大坂ノ死人17530人 境大坂之間新田民家損し、人水ニ溺レ凡2000人程死 倒れ家 1704軒 死人 543人 落橋 30余 破損船429艘 大坂にてハ…九日迄に死人式万口千人と公義に書付上ル		貝原益軒 九州史料刊行会『九州史料叢書十』1956 (当時益軒は福岡城下在住か)	『新収日本地震史料第三巻別巻』
18	伊藤氏家乗				「東涯家乗之二」天理図書館古義堂文庫 (当時伊藤東涯は京都在住)	『新収日本地震史料第三巻別巻』
19	江府京駿雑志		崩家10630軒余 押打タレ死 3620人 溺水死 12000人 十死一生之者 7800人 大船ノ損780艘 300石積～2500石 大坂落橋35	「右ハ同月七日迄相知タル分也」	今枝直方著 雑記 元禄16～宝永5 金沢市立図書館加越能文庫に自筆写本有(国文学研究資料館「日本古典籍総合目録データベース」より) 今枝は加賀藩士(承応2～享保13)後に家老 著作多数	『新収日本地震史料第三巻別巻』
20	長野日記		潰家603軒 竈数10000 死人3620余人 溺死人12000人 落橋25ヶ所 損橋4 船大小3527艘 潰家603軒 竈数10006 随死人3620人 溺死人12000人 落橋25 折橋4 船大小127艘	「御蔵元る言上」	福岡藩士・右筆長野常言(?～享保21)の日記、元禄8～享保20。写本各種あり。上段は九州大学蔵「永野日記」二冊本、下段は福岡県立図書館蔵「長野日記」上下合冊本の数値。後者の翻刻は秀村選三編『近世福岡博多史料 第一集』(西日本文化協会、1981)	『新収日本地震史料補遺別巻』

21	杠日記		崩家1060軒 竈6000軒 死人530人余		島根県仁田郡横田町馬木 → 地震史料の仁田郡は誤記。仁多郡横田町は合併により現奥出雲町。大馬木の杠氏は鐘師	『新収日本地震史料続補遺別巻』
22	大地震大津浪末代断		落橋数36橋 北組 崩家 579軒 死人 凡278人 男114人女164人 南組 崩家 314軒 死人 凡345人 男148人女187人 天満組 崩家 168軒 死人 凡111人 男31人女80人 三郷 崩家 1061軒 死人 734人 竈数16000程 破損舟数大小1300余艘 口死人12000人余	今昔地震津浪説「右宝永四年の宝暦六子迄五十年」「右之通去ル家之旧配を爰ニ出す也 但し宝永四亥年より今嘉永七寅年まで百四十八年になる」	徳島県立文書館蔵 酒井家文書 阿波国美馬郡旧半田村(現つるぎ町)の商人	『日本の歴史地震史料』拾遺』四ノ上
23	岡本元朝日記		町屋土蔵共ニ900軒程潰 橋35.6落し所損し所有 死人260人余 死人16000人余 潰家町積560町余	10/13「廻状ニ申来」 10/20「廻状ニ申来」	秋田県公文書館蔵 岡本元朝は秋田藩家老、当時江戸屋敷滞在中	『日本の歴史地震史料』拾遺』五ノ上
24	公儀支扣		死人18000人余 倒家潰家数万軒 落橋数十ヶ所	「両度地震之事」	山口県文書館蔵毛利家文書	『日本の歴史地震史料』拾遺』五ノ上
25	大昔宝永四年地震津浪聞書		南組北組潰家 620軒 南組押打死人 3620余人 北組同2331人 南組水死 12000人 北組同 12030人 落橋22 折橋4 廻船大小127艘日本橋迄押	「宝永四年嘉永七寅迄百四十八年二成」	東京大学大学院情報学環・学際情報学府図書室所蔵小野秀雄コレクション 大阪府立中之島図書館所蔵の読売貼り交ぜ冊子「地震津浪末代断の種」「大地震末代断の種」にも同一のものが含まれている。	<a href="http://www.lib.iit.u-tokyo.ac.jp/ono_collection/contents/item.37.N001.html">http://www.lib.iit.u-tokyo.ac.jp/ono_collection/contents/item.37.N001.html</a>
26	鷗鷗籠中記		崩家 940軒余 死人264人 落橋35ヶ所 内 北組 崩家513ヶ所 死人128人 橋14ヶ所 南組 崩家260軒 死人84人 橋損し15ヶ所 天満組 崩家160ヶ所 死人53人 橋6ヶ所 竈数16000余潰 落橋26ヶ所 廻船川内にて破損 322艘 800石以下の小船不知数 圧死 3630人 溺死 12100人余	「今月六日迄大坂町奉行衆へ書上御座候」 「今月十日迄之書上也」	徳川林政史研究所蔵 翻刻は『名古屋叢書続編』9-12巻 尾張藩士朝日重章(延宝2~享保3)の日記	矢田俊文「1707年宝永地震と大坂の被害数」(『災害・復興と資料』2号、2013)
27	塩尻		棟数603軒 竈数10100軒 圧死3620人 溺死12000人余 落橋22ヶ所 破船大小650余艘	「摂州大坂地震之惣改」	写本は各所に蔵 翻刻は『日本隨筆大成』第三期18 尾張藩士・国学者天野信景(寛文3~享保18)の隨筆集	矢田俊文「1707年宝永地震と大坂の被害数」(『災害・復興と資料』2号、2013)
28	朝林		竈数 3537 此町役653軒 押打たれ死5351人 溺死16371人	「十月十日迄公儀御帳面写のよし」	名古屋市蓬左文庫蔵 翻刻は朝林研究会編『朝林後編』尾張藩士堀貞儀(~1737)	矢田俊文「1707年宝永地震と大坂の被害数」(『災害・復興と資料』2号、2013)
29	大地震洪浪見聞筆記		北組 崩家519軒 死人278人 南組 崩家314軒 死人345人 天満組 崩家168軒 死人111人 三郷崩家 1061軒 死人 734人 大汐損シ破れ家603軒 橋数50 舟数大小1300余艘 流死10000人余	「大坂筆記写し」「宝永四より宝暦六年迄五拾年ニ当る」「此様子ハ大坂問屋より筆記かり受写し取」	徳島県立図書館所蔵写本(呉郷文庫) 元は安政三年七月迄に阿波国海部郡瀬浦(現海陽町瀬浦)善称寺の住持が記載した見聞記	『新収日本地震史料第三巻別巻』
30	大地震記		類家15000余宇 圧死3700余人 水死12063人 破船953艘	「(題箋)宝永四年十月」「今日未申ノ中間水陸ニテ町々ヨリ其数ヲ録シテ指出サセ集メケルニ」「天明八戌申夏六月 玉田氏」	大阪府立中之島図書館所蔵写本 なお同館蔵の「浪花地震物語」もほぼ同文の写本 原典の作者・成立事情は不詳。宝永地震時大坂の詳細な見聞録・隨筆	『新収日本地震史料第三巻別巻』